

「〈知〉のオントロジー」—現代思想の構図— : (1/9)

by 佐伯 守 (2000.12.25、萌書房):

## はじめに

(transformed by Takaya Endo)

---

はじめに

### I. 原秩序の構図

- 1.1 〈生きること〉の構図を描いたベルグソンの文章
- 1.2 〈向かいあう存在〉をどのような視点でみつめ
- 1.3 〈身分け構造〉を生み出し維持すること

### II. 科学性の構図

- 2.1 現実＝現実性をめぐる議論から始めます
- 2.2 〈非現実性〉という言い方は
- 2.3 科学的現実の世界では
- 2.4 現実の〈法則性〉とは

### III. 生命性の構図

- 3.1 こんにちの思考装置から
- 3.2 固定的な不変の〈同一性〉というイメージは
- 3.3 生命(過程)の〈流れ〉は
- 3.4 モランは生命システムを
- 3.5 自己参照的に自己組織する

### IV. 回帰性の構図

- 4.1 生命体を〈主体〉としてみる発想は
- 4.2 バックルは物ではなく、ある回帰的事態の出現それ自体
- 4.3 モランの思想をもう少しみつめる
- 4.4 具体的に〈分離と結合〉という点にふれる

### V. 複雑性の構図

- 5.1 複雑性、不確定性をキーワードとするN.ルーマンの社会システム論
- 5.2 環境、システム環境、環境分化、環境変動、境界、世界といった概念
- 5.3 〈複雑性〉に新たな要素を加えることによって、それをさらに重層化
- 5.4 或る行為の意味は別の文脈では別様に意味〈体験〉され解釈される
- 5.5 社会システムは直接的に生身の人間によって成立しているのではなく

### VI. 規範性の構図

- 6.1 N.ルーマンの考え方の基本
- 6.2 社会システムは予期の予期という反射過程のうちに生じた〈違背〉の処理

に備え

6.3 強制の可能性をふくまない規範は実定〈法〉としての効力を喪失

6.4 予期体験は時間体験に沿って展開される〈差異性〉の体験と表裏一体的なもの

## Ⅶ. 無底性の構図

7.1 〈差異〉は物事の静止的固定的な区別や区分けとは別の概念

7.2 〈このもの〉性は或る瞬間のうちの現われであるかも知れません

7.3 ドゥルーズは〈差異が差異化する〉という事態を認識論の中心に据えた

7.4 〈差異〉は多様体、変化性から産出されるもの、そこから湧出するもの

### 付論. 西田哲学と〈場〉

8.1 西田哲学における〈場所〉や〈場所的有〉の概念の広袤を検討する

8.2 〈関係の第一次性〉を説いた廣松渉の思想の根底にある〈反〉実体主義

8.3 粒子も〈場〉もイメージ化の困難なもの

8.4 カッシーラーの言う〈場〉と西田幾多郎の言う〈場所〉との関連性

8.5 〈即〉は単なる同等性・同一性のことではなく、〈表現〉関係・〈映写〉関係の相即性

8.6 〈個＝個体〉の問題、述語が創出する主語といった問題

8.7 個の〈個性〉は〈場所的有〉の出来事

## はじめに

かつてショーペンハウアーは次のように述べました。

「あらゆる学問の基礎や根本内容は、証明や証明されたもののうちに存するのではなく、その証明が、それを基礎としているところの証明されないもののうちに存し、この証明されないものは、結局はただ直観的にしか把握されないのである。それと同様に、すべての人間の本来の叡智と現実的洞察の基礎は抽象的な概念と知に存するのではなく、直観されたものと、人間がこの直観されたものを把握した鋭さ、正しさ、深さの度合いとにある。」(塩屋竹男他訳『意志と表象としての世界』続編1、第二部第七章)

そうした直観の仕事の一例として、次にヘーゲルのことばを引いておきます。

「人間は、彼自身における直接的現存在[エグジステンツ]からいえば、一つの自然的なものであり、彼の概念にとって外的なものである。人間は、彼自身の肉体と精神をつくりあげることによって、すなわち本質的には、彼の自己意識が自分を自由なものとして捉えることによってはじめて、自分を占有取得[ヴェジツツ]し、彼自身の所有[アイゲンタム]となり、他の人たちにたいして(gegen Andere)自分のものとなる。」(藤野渉他訳『法の哲学』§ 57、傍点引用者)

〈主と奴〉の人間関係を背景としてもつこの自由論は、証明ぬきのままながら、なお重要性をもっています。ところで、証明するとは、なんらかの根拠を示すことですが、往々にして、当の根拠のさらなる根拠となると、説明不能とか不明ということになります。私たちは多くの分野で根拠なるものの崩れを経験しました。

ニーチェが〈神は死んだ〉と言ったとき、その神は大いなる根拠の意味ももっていました。神という最高の根拠が滅して、支えというものをもたない〈永遠回帰〉が根拠のかわりとなったわけです。いまや〈場〉や〈過程〉や〈運動〉が、かつての根拠の位置を占めています。

論理的な支えとしての根拠もあれば、生きるための精神的な支えの根拠もあります。むろん、社会的＝制度的な支えとしての根拠もあります。いずれにせよ、根拠のなさをどの程度の〈深さ〉で把握するか、そしてその場所で、あらためて物事をみつめ直し、それについてなに事かを語ることが、哲学の仕事のように思います。根拠のないところでこそ初めて〈有[ある]〉ということが祝福をうけることになるでしょう。

仏教に〈色即是空、空即是色〉という考えがあります(「般若心経」)。これを、〈色〉つまり事象や形象はしょせん空虚なものだというふうには悲観的に読むのではなく、存在するもの(=色)は、実体的なもの、根拠的なものなま(=空)に、すべてがりっぱに〈有〉の一員である(=仏性をもつ)、というふうには読んでみてはどうでしょう。

仏教的なく依他起性[えたきしょう]の発想によれば、すべては関係性(此縁性[しねんしょう])のもとにあり、〈縁起-無自性-空〉のつながりの外に存立しうるものはありません。〈依存関係にある存在[もの]の実体は空[くう]なり〉です。〈空〉は無ではなく、関係の充実の〈場〉のごときものであり、その結節点やら関係態が〈色〉ということになります。

---さて、この拙著は旧著『知の思想を読む』(知楨[\*石ヘン]書院)が絶版となっていることをうけて、これに大幅に手をいれて成ったものです。〈読む〉を主旨として、また、同じく旧著『〈場所的〉ということ』(晃洋書房)ともその問題意識、表現方法を共有しています。

さいごになりますが、今回もまた白石徳浩氏のお世話になりました。厚く御礼申し上げる次第です。

二〇〇〇年八月二十三日

著者